

令和 7 年度入試 論述試験

リハビリテーション科学学位プログラム 博士前期課程

区分	
出題意図	<p>問題 1</p> <p>表 1、表 2 は、内閣府が令和 3 年度に報告した高齢者の暮らしに関する調査結果である。表 1 は、60 歳以上の男女を対象に孤立死を身近な問題と感じるかを調査したものである。表 2 は、東京 23 区内における一人暮らしで 65 歳以上の人の自宅での死亡者数を示したものである。</p> <p>(1) 表 1 及び表 2 から読み取れることを 400 字以内で述べなさい。</p> <p>(2) (1) で読み取った内容に基づき、高齢者の孤立死を社会全体として防ぐにはどのような方法が考えられるか。あなたの専門性を考慮して 600 字以内で述べなさい。</p> <p>問題 2</p> <p>次の文章（4 頁～6 頁）は、仲正昌樹氏による『「不自由」論 「何でも自己決定」の限界』（仲正昌樹著、ちくま新書 432、2003 年、p. 182～187）の一部を抜粋して掲載したものである。</p> <p>この文章を読んで、以下の設問（1）と（2）に答えよ。</p> <p>（この部分は著作権の都合上、公開できません）</p> <p>(1) 本文の要旨を 400 字以内で述べなさい。</p> <p>(2) 著者は、本文の下線部で「<u>これまで放置されてきた『自己』決定の問題</u>に対して、何らかの形で『社会』が関与しようとする場合、『イマジナリーな領域への権利』という準・法的概念が必要になってくる」と述べている。</p> <p>なぜ自己決定において「イマジナリーな領域への権利」が必要なのか。本文の論旨をふまえ、あなたが関わっているリハビリテーションの実践や事例を用いて、400 字以上 600 字以内でわかりやすく説明しなさい。</p>

	<p>論述試験では、専門科目としてリハビリテーションに関する課題に関する試験を行うこととなっている。</p> <p>問題1：統計データの読解と社会的課題への対策</p> <p>本問題は、現代社会における喫緊の課題である「孤立死」をテーマとし、データの読み取り能力と、専門的知見に基づいた論理的思考力を問うものである。</p> <p>(1) 内閣府の調査結果（意識調査）と東京都23区の実績（実数）という、性質の異なる2つの表を正確に照らし合わせる力を評価する。孤立死を身近な問題と感じる世帯別の傾向と、一人暮らし世帯における死亡者数の年次推移の実態についてデータから読み取り、要約する能力を判断する。</p> <p>(2) (1)で把握した実態に対し、リハビリテーション専門職としての視点から具体的な解決策を提示できるかを問う。身体機能の維持、社会参加の促進、あるいは地域包括ケアシステムの中での多職種連携など、自身の専門性を活かした「予防」や「早期発見」の仕組みを論理的に構築できるかを判断する。</p> <p>問題2：論説文の要約と概念の臨床的応用</p> <p>本問題は、仲正昌樹氏の論考を題材に、読解力と抽象的な概念を具体的なリハビリテーションの実践現場の課題として解釈する応用力を問うものである。</p> <p>(1) 既存の「自己決定」概念の限界と、他者との関係で自己が形成される「イマジナリーな領域」の重要性を説く論理構造を正確に捉える力を問う。筆者の主張を歪めることなく、400字以内で論理的に再構成する記述力を判断する。</p> <p>(2) 「イマジナリーな領域への権利」という抽象度の高い概念を、リハビリテーションの実践（意思決定支援、インフォームド・コンセント、患者の価値観の尊重など）と結びつけて説明する力を問う。この概念が臨床現場における自己決定においてどのような意味となり得るかを、自身の経験や具体的な事例を用いて論理的に記述できているかを判断する。</p>
--	--